

「浜松地域の農産物を活用した「地産地食」の子ども食堂と「地域のためのおしごと体験」を通して行うこどもの貧困支援」

浜松学院大学 現代コミュニケーション学部

渡部ゼミ（研究室）

指導教員：教授 渡部いづみ

参加学生：鈴木ステラ、藤丸力也、嘉戸泉美、
北川一磨、蔵増慶太、徳井瑞紀、柳田千尋、
山本彩久乃、千葉龍羅、大場敦弥、平岩慶一郎、
中村瀬里香、森下慧哉

1. 要約

昨年度の助成事業として採択された子ども食堂の開催にプラスする形で、「地域のためのお仕事体験」を実施した。子ども達には、本ゼミで5年余り続けているHGU朝市のスタッフとして、介護付き老人ホームのお年寄や地域住民を相手に、品出しや接客、会計などの仕事を体験してもらった。学生達がフォローしながらも、基本的には子ども達に仕事を任せ、責任を持って仕事を行うことの大変さと、同時に顧客から感謝された時の達成感を与えられるよう導いた。仕事体験後は、朝市で扱う地元産の野菜や果物を使用し、学生達と一緒にバーベキューを行い、楽しみながら、学びながらの食事を提供した。

2. 研究の目的

子どもの貧困対策として有効だとされる子ども食堂であるが、昨年度は、偏見などにより参加してもらい子ども達を集めることが困難であった。それでも、子ども食堂を必要としている子どもや親は必ずいると確信し、単に食事を提供するのではなく、一緒に仕事をしたり、役割を持たせたりしながら食事を楽しませることに注力した。同時に職業体験をさせることで、社会のしくみを学び、働く意義ややりがいを持たせ、勉学や進学への意欲に繋げ、貧困の連鎖が起き難い環境作りをする。

3. 研究の内容

第1回 2018年9月16日（土）浜名湖エデンの園（介護付き老人ホーム）出張HGU朝市での仕事体験とバーベキュー（雨天のため、屋内で実施）参加者 子ども10名、学生13名、教員

第2回 2018年10月15日（日）渚園キャンプ場 バーベキュー（雨天であったが屋外〈屋根付き〉で実施）参加者 子ども8名、学生9名、教員

第3回 2018年11月3日（金）浜松学院大学 HGU朝市での仕事体験とバーベキュー（浜松学院大学キャンパス内）参加者 子ども12名、学生11名、教員

昨年度は、子ども食堂に参加してもらい子どもの募集が非常に大変だったため、その点について、対策を行った。小学校の放課後教室や、地域の放課後教室などへのチラシの配布を行うと同時に、民生委員に協力を呼びかけ、参加希望者を確保した。また、仕事体験やバーベキューを実施することで、イベント性を高め、子ども食堂を貧困や孤食というイメージに結び付けないよう工夫した。第1回目のエデンの園では、お年寄を相手に販売を行ったことから、顧客にも喜んでもらうことができ、子ども達も感

謝の言葉を受け、非常に達成感を感じられたようであった。初めての出張朝市で、悪天候の中、移動や準備などが大変であったが、会場となったエデンの園からも非常に歓迎された。朝市後にバーベキューを行うにあたり、校舎内であったため、ホットプレートを使用したバーベキューとなった。屋外でのバーベキューを予定していたが、天候が回復しないため、屋内での開催となり、配線や調理など、非常に大変であったが、子ども達は楽しんでいた。

第2回目も、悪天候であったが、渚園キャンプ場でバーベキューのみを実施した。静岡新聞の取材があり、子ども達も記者に質問されるなど、特別な体験となった。強い雨の中の実施であったため、学生は大変であったが、キャンプ場でのバーベキューとのことで、イベント性が増し、子ども達には好評であった。新聞に活動が掲載されるにあたって、次回の募集なども記事にしてもらえ、より広い告知を行うことができた。

第3回目は、祝日で大学が休みであることを利用して、いつもHGU朝市を行っているキャンパス内で仕事体験とバーベキューを実施した。朝市の顧客が多く訪れたことで、子ども達の仕事も多岐に渡り、張り切って作業を行っていた。また、中日、静岡のふたつの新聞社に取材してもらい、地域に広くこの活動を広めることができた。子ども達も、いきいきと仕事体験とバーベキューに参加していた。

4. 研究の成果

昨年度の課題であった参加者の募集については、早くから民生委員と連携をとっていたため、比較的計画通りに進めることができたが、地域の祭りと開催日が重なった時に、非常に募集に苦労した。また、当初は、バーベキューを全て屋外で開催する予定であったが、昨年9月から11月にかけては、異常気象のせいで雨天の日が多く、この不安定な天気が最大の課題であった。しかし、予定の回数をこなすことができ、参加した子ども達やその保護者、民生委員からは、「楽しかった。」「是非また参加したい。」「大学生とのふれ合いが、非常に嬉しかったようだ。」と好評であった。

子ども食堂で食事を提供するだけでなく、職業体験を取り入れたことで、子どもが役割を持ちながら参加できたことは、昨年度の活動を一步前進させたように感じる。

当ゼミで、地域住民のために5年以上続けているHGU朝市というフィールドを活用できたことで、学生の自信にもつながり、同時に子ども食堂や職業体験という活動を地域住民にも知ってもらう機会となった。

昨年度のように、食事を提供するだけでなく、職業体験やバーベキューで、子ども達が学生と共に過ごし、作業する時間が増え、活動の当初の目的でもあった子ども達の思い出作りという点においても、成果を出すことができた。

また、地域の老人ホームで開催できたことで、施設の管理者、入居者に子どもの貧困、孤食など、地域内でも経済格差による課題があることを認識してもらうことができ、昨年度と比較し、周囲を巻き込んだ活動に発展させることができたことは意義深い。

5. 地域への提言

2015年に日本政府が発表した数値では、子どもの貧困率は16.3%（2012年）で実に約6人に1人が貧困状態とされる子どもという計算になる。子どもの貧困が、わが国で注目されるようになって10年近く経過するが、子どもの貧困率は年々増え続けている。2016年にユニセフが、貧困世帯の子どもと標準的世帯の子どもの格差がどの程度広がっているのかを調査したところ日本は、先進41ヶ国中、34位であることがわかった。韓国15位、アメリカ30位という順位を見れば、わが国の貧困がいかに深刻であるか理解できる。

しかし、この6人に1人の貧困状態というのは、あくまで全国平均であり、10人に1人の地域もあれば、

2人に1人の地域もある。この地域格差が、子どもの貧困問題を複雑にしている。貧困率が低い地域では、「この豊かな日本で食べられない子どもがいるのか？」と感じる人も多く、子どもの貧困が他人事であり、関心も危機感も低い。そのような中で、自分達が生活している浜松地域でも、子どもの貧困や孤食という問題が起きているということを、多くの人に知ってもらい、ともすれば深く潜行しがちな地域課題を、大学や学生、地域住民が共有することが重要である。子どもの貧困対策は、社会の優先課題であり、他人事ではなく「自分事」として地域全体、社会全体で考えていかなければならない問題である。

6. 地域からの評価

「子ども食堂と子どもの職業体験」といテーマに関心を持ったメディアに、計3回の取材を行ってもらえたことで、経済格差による子どもの貧困や孤食という問題が、比較的豊かであるとされる浜松地域にも起こっているということを、広く発信することができた。記事を読んだという反響もあり、微力ではあるが、啓発活動という役割も担えたのではないか。参加した子ども達も、働くということを楽しく体験することができ、保護者からも、子どもが職業体験について報告してくれたと前向きな評価を頂いた。朝市の顧客達にも、子ども食堂や職業体験を理解してもらおうきっかけとなり、続けての開催を依頼されるなど、好評であった。